

東日本大震災の資料レスキュー～岩手県遠野市の事例

遠野市文化課（遠野市立図書館博物館） 副主幹 前川さおり

1 岩手県遠野市と三陸沿岸の関係

岩手県遠野市は、北上高地のほぼ中央に位置し、内陸と三陸沿岸の主要な自治体とは、車で約1時間の距離。

2 陸前高田市立博物館でガレキの中のメッセージ



写真1 「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です 市教委」

3 遠野市立博物館と遠野文化研究センターの文化財レスキュー

(1) 陸前高田市

陸前高田市海と貝のミュージアム、鳥羽源蔵生家、陸前高田市立博物館、陸前高田市埋蔵文化財収蔵庫

(2) 釜石市でのレスキュー

釜石市郷土資料館収蔵庫、釜石市役所行政文書（国文学研究資料館から応急乾燥方法「スクウェルチ・パッキング法」の指導を受ける）

(3) 大槌町立図書館

大槌町立図書館は津波により壊滅的な被害を受け、蔵書5万3000冊の多くが流失した。同年5月17日～19日にかけて回収作業（写真2）を行って遠野市に移送し、応急乾燥やクリーニング作業を行うこととなった。

4 バリエティに富んだ遠野市内での大槌町資料レスキュー作業

(1) 風乾を試みる

大槌町立図書館の被災資料は明治時代からの議会議事録資料、新聞スクラップ、郷土資料等約1000点を遠野市立博物館の館外収蔵庫の下屋に移送し、簀の子を敷いて風通しをよくしたところに本を立てて載せ、風乾を試みたが海水の塩分を含んだ紙の乾燥は遅かった。

同時並行で冷凍庫保管や真空凍結乾燥機による乾燥作業の受け入れ先を探したが、被災資料は指定文化財ではないこともあり、見つめることができなかった。



写真2 大槌町立図書館のレスキュー

(2) スクウェルチ・パッキング法の導入

風乾では資料の乾燥が芳しくなかったため、スクウェルチ法を糸で綴られている議会議事録や和本資料を対象に6月から導入し、吸水紙を交換を1週間おきに4回繰り返したところ、同年8月15日までにはすべてのページが開くまで乾燥し、カビの発生もなかった。(写真3)

この方法の利点は、○技術の習熟が容易で一度に大量の資料を処理可能、○資材の入手が容易、○吸水紙が汚れや塩分も吸い取るので、紙の色や状態がよい、といった点が見られる。

その一方で▲大量の人手が継続的に必要となり、災害ボランティアの援助で継続的に作業を行うようになった。

陸前高田市立博物館でも同じ時期にこの方法を試みたところ、途中カビが発生し中止している。遠野市では年平均気温9℃と年間を通して冷涼な気候のため成功したのではないかと考えられる。

(3) ナンバリングとドライクリーニング

同年7月28日から一次乾燥した資料に1枚1枚鉛筆で番号を書き込むナンバリング、さらにブラシなどで泥や砂を落とすドライクリーニングを行い、アルコールを噴霧した。この時点で紙の含水率は約20%で、通常の含水率7%よりも多かった。紙の中に塩分が残存しているため、水分が維持されていた。

(4) フローティング・ボード法による水洗とエア・ストリーム乾燥法の導入

「東京文書救援隊」から技術と資材の提供を受け、同年8月2日から導入。フローティング・ボード法は、発泡スチロール浮き板を水に浮かせ、金網で紙資料を挟んで浮き板に乗せて、浮き板を揺り動かしながら水を入れて刷毛で汚れを落としていく水洗方法である。(写真4)



写真3 スクウェルチ法の乾燥



写真4 フローティング・ボード法的水洗



写真5 エア・ストリーム法の乾燥

続けて「エア・ストリーム法」で乾燥させた。ペット用タオルで水分を吸い取った後、ろ紙・段ボールで挟み込み、最後に漬物用の重石を載せて反り返りを防ぎながら、2段の可動式スチールラックに載せ、一方から扇風機で風の流れを送り乾燥させた。(写真5) これにより被災資料の紙の含水量は7%に戻った。

乾燥が済んだ資料で破損があったものは、和紙で補修し、新たに表紙をつけて綴り直す作業を行った。

(5) 大槌町立図書館資料の返却

レスキュー作業は2013年3月28日で完了していたが、大槌町が保管場所の確保されるのを待ち、2015年5月18日に合計点数1034点を返却した。